

縄文時代の「貝塚」と平成時代の「ゴミ捨て場」の違い(早見表)

「貝塚＝ゴミ捨て場」説は、明治の初期に大森貝塚を発見した米国の動物学者(モース博士)が最初に唱えた説です。

ちなみに、モース博士は、神の存在を認めない「唯物論者」でした。

また、モース博士は「縄文人＝人食い人種」説も唱えていましたが、こちらはすぐに否定されています。

なぜなら、縄文時代は(お金がなくても)食べるものに不自由をしない、資源に恵まれた「豊かな時代」だったからです。

それでも、縄文人たちは決して“飽食、はしませんでした。そのことは、貝塚の中身を調べているうちにわかってきたことです。

縄文人は(戦争のない)平和を愛する心豊かな「アーティスト集団」だった。

一度で結構ですから、そう考えてみてください。

縄文人たちが、なぜ、あのような日常性を超えた土器や土偶を作り、世代を超えて巨大な貝塚を作り続けたのか…

縄文人の遺伝子が残っている(物にも命があると考え)日本人であれば、その理由がきっとわかるはずです。

下の表をご覧になって、縄文時代には現代の日本人が考えるような「ゴミ捨て場」はなかったことをご確認いただければ幸いです。

	貝塚		ゴミ捨て場	
生活圏との距離	近	集落のすぐ近くにある	遠	町から遠いところ(山や海)にある
使用期間	長	長いもので約1000年使用	短	長くても15年から20年の使用
高さ	高	目線の高さよりも上(地上)にある	低	目線の高さよりも下(地下)にある
分別	有	原則として有機物は分けている	無	基本的に有機物と無機物を一緒に埋め立てている
前処理	有	貝殻を洗ってから埋め立てている	無	基本的に何もしないで埋め立てている
埋立方法	丁寧	貝殻をきれいに並べて埋め立てている	雑	車から落としてそのまま重機で埋め立てている
分解の意図	無	地上に積み上げて消滅させない場所	有	地下に放り込んで消滅させる場所
視覚の活用	有	なるべく見えるようにしている	無	なるべく見えないようにしている
創造力	要	物を物を超えた存在に変える場所	不要	物を物のまま放置して存在を忘れる場所
感謝の気持ち	有	心を形で表現する場所	無	物と心を一緒に廃棄する場所
イベント性	有	住民参加型(お祭り感覚)	無	自治体依存型(お任せ感覚)
リデュースの可能性	有	資源の消費活動に満足感が生まれる	無	資源の消費活動に欠乏感が生まれる
リサイクルの可能性	有	未来の人間が貝殻を再生利用している	無	未来の人間が再生利用することを拒絶している
貝殻をゴミと考える発想	無	貝殻も自然の一部と考えている	有	貝殻を生活に不必要なものと考えている
人間と自然との関係	密	人間も自然の一部と考えている	疎	自然と人間の生活を切り離して考えている

	貝塚		ゴミ捨て場	
芸術性	高	貝殻のある自然と共生することが前提	低	貝殻のない自然と共生することが目標
聖域的な感覚	有	先祖代々利用している場所	無	先祖とは無関係な場所
存在に対する不安	無	存在していることで安心感が得られる	有	存在しないことで安心感が得られる
永久管理の意思	有	最大の喜び	無	最大の苦しみ
環境教育効果	大	子供たちが大人になっても毎日目にする場所	小	子供たちが学校の授業で一生に一度目にする場所

日本人は、外国人による「貝塚発見」から現在に至るまで、基本的に「縄文時代」のことを詳しく学んでいません。

日本の教科書に「縄文時代」が登場するのは戦後からですが、近年は戦前とほとんど変わらない状況になっています。

このため「貝塚＝ゴミ捨て場」説は、100年以上たった今でも、日本人の頭と心の中に深く刻み込まれています。